

錦染滝白糸

——其一幕——

泉鏡花

青空文庫

場所。

信州松本、村越の家

人物。

村越欣弥（新任検事）

滝の白糸（水芸の太夫）

撫子（南京出刃打の娘）

高原七左衛門（旧藩士）

おその、おりく（ともに近所の娘）

撫子。^{なでこ}円鬚、^{まるまげ}前垂^{まえだれ}がけ、床の間の花籠^{はなかご}に、黄の小菊と白菊の大輪なるを^{つぼみ}苔ま

じり投入れにしたるを^{なが}視め、手に三本ばかり^{みもと}常夏^{とこなつ}の花を持つ。

^{かたわら}傍におりく。車屋の娘。

撫子 今日——お客様がいらつしやるツて事だから、籠も貸して頂けば、お庭の花まで御無心して、ほんとうに済みませんのね。

りく 内の背戸にありますと、ただの草ツ葉なんですけれど、奥さんがそうしてお活^いけなさいますと、お祭礼^{まつり}の時の余所行^{よそゆき}のお曠衣^{はれ}のように綺麗^{きれい}ですわ。

撫子 この細^{ほっそ}りした、（一輪を指^{ゆびさ}す）絹糸のような白いのは、これは、何と云う名の菊な^いんですえ。

りく 何ですか、あの……糸咲^{いとさき}々々つてお父^{とつ}さんがそう云いますよ。

撫子 ああ、糸咲……の白菊……そうですか。

りく そして、あのその撫子はお活けなさいませんの。

撫子 おお、この花は撫子ですか。（手なる常夏を見る。）

りく ええ、返り咲の花なんですよ。枯れた薄^{すすき}の根に咲いて、珍しいから、と内でそう申

しましてね。

撫子 その返り咲が嬉しいから、どうせお流儀があるんじゃないし、綺麗でさえあれば可い、

去嫌さりぎらい構わずに、根々《ねじめ》にしようと思っただけで、白菊が糸咲で、私、

常夏と覚えた花が、撫子と云うのでしたら、あの……ちよっと、台所の隅へでも、瓶に挿しましょう。

りく そう、見つけて来ましょう。（起つ。）

撫子 （熟と籠なると手の撫子とを見較ぶ。）

りく これじやいか。

撫子 ああ結構よ。（瓶にさす時水なし）あら水がない。

りく 汲んで来ましょう。

撫子 いいえ、撫子なんか、水がなくなつて沢山なの。

りく まあ、どうして？

撫子 それはね、南京流なんきんりゅうの秘伝なの。ほほほ。（寂しく笑う。）

おその、蓮葉はすはに裏口より入る。駄菓子屋の娘。

その奥様。

撫子 おや、おそのさん。

その あの、奥様。お客様の御馳走だつて、先刻、お台所で、魚のお料理をなさるのに、小刀でこしらえていらした事を、私、帰つてお饒舌をしましたら、お母さんが、まあ、何というお嬢様なんだろう。どんな御身分の方が、お慰みに、お飯事をなさるんでも、それでは御不自由、これを持つて行つて差上げな、とそう言いましてね。（言いつつ、古手拭を解く）いま研いだのを持つて来ました。よく切れます……お使いなさいまし、お間に合せに。……（無遠慮に庖丁を目前に突出す。）

撫子 （ゾツと肩をすくめ、瞳を見据え、顔色かわる）おそのさん、その庖丁は借ません。その ええ。

撫子 出刃は私に崇るんです。早く、しまつて下さいな。

その 何でございますか、田舎もので、飛んだことをしましたわ。御免なさい、おりくさん、お詫をして頂戴な。

りく お気に障りましたら、御勘弁下さいまし。

撫子 飛んでもない。お辞儀なんかしちやあ不可ません。おそのさん、おりくさん。

りく いいえ、奥様、私たちを、そんな、様づけになんかなさらないで、奉公人同様に、

りくや。

その その、と呼棄てに、お目を掛けて下さいまし。

撫子 勿体ないわね、あなたがたはれつきとした町内の娘さんじゃありませんか。

りく いいえ、私は車屋ですもの。

その 親仁は日傭取の、駄菓子屋ですもの。

撫子 駄菓子屋さん立派、車屋さん結構よ。何の卑下する処があります。私はそれが可

羨しい。狗の子だか、猫の子だか、掃溜ぐらいの小屋はあっても、縁の下なら宿な

し同然。このお邸へ来るまでは、私は、あれ、あの、菊の咲く、垣根さえ憚つて、この

撫子と一所に倒れて、草の露に寝たんですよ。

りく あら、あんな事を。

その まあ……奥様。

撫子 その奥様と言われるのを、済まない済まない、勿体ない、と知っていながら、つい、

浅はかに、一度が二度、三度めには幽に返事をしていました。その罰が当たったんです。

いまの庖丁が可恐い。私はね、南京出刃打の小屋者なんです。

娘二人顔を見合わず。

俎まなの上で切きり刻ぎまれ、礫はいつけにもかかる処を、神様のような旦那様に救われました。その神様を、雪が積こまつて、あの駒こまヶ岳へあらわれる、清い気高い、白い駒、空におがんでいなければならぬんだのに。女にうまれた一生の思出に、空耳でも、僻ひがみ耳でも、奥さん、と言われたさに、いい気になつて返事をして、確たしかに罰が当たったんです……ですが、この円鬚まるまげは言訳をするんじゃないやありませんけれど、そんな気なのではありません。一生涯ほか他へはお嫁入りをしない覚悟、私は尼になつた氣です。……（涙ぐみつつ）もう、今からは怪けが我にだつて、奥さんなんぞとおつしやるなよ。おりくさん、おそのさん、更あらためてお詫をします。

りく それでも、やつぱり奥さんですわ。ねえ、おそのさん。

その ええ、そうよ。

撫子 いいえ、いま思知つたんです、まったく罰が当たりますから、私を可かわい哀そう想だと思いなすつたら、このお邸のおさんどん、いくや、いくや、とおつしやつてね、豆腐屋、薪屋まさやの方角をお教えなすつて下さいまし。何にも知らない不束ふつつかなものですから、余所よその女中に虐いじめられたり、毛色の変つた見世物みせものだと、邸町やしきまちの犬に吠ほえられましたら、せめて、貴女あなた方がたが御ご鼻ひ臍いきに、私を庇かばつて下さいな、後生ですわ、ええ。

その 私どうしたら可いでしょう——こんなもの、掃溜へ打棄^{うつちや}つて来るわ。(立つ。)

撫子 ああ、靴の音が。

りく 旦那様のお帰りですね。

村越 欣弥。^{むらこしきんや} 高^{たか}原^{はら}七^{しち}左^ざ衛^え門^{もん}。^{たかはらしちざえもん} 登場。道を譲る。

村越 ま、まあ、御老人。

七左 いや、まず……先生。

村越 先生は弱りました。(忸怩^{じくじ}たり)では書生流です、御案内。

七左 その氣象！ その氣象！

撫子。出迎えんとして、ちよつと髻に手を遣^やり、台所へ下らんとするおりくの手を無理に取つて、並んで出迎う。

撫子 お帰り遊ばせ。

村越 お客様に途中で逢^あつたよ。

撫子 (一度あげたる顔を、黙つてまた俯向^{うつむ}き、手をつく。)

七左。よう、という顔^{かおつき}色にて、兀^{はげ}頭^{あたま}の古帽を取つて高く挙げ、皺^{しわ}だらけにて、ボタン二つ離れたる洋服の胸を反らす。太きニツケル製の時計の紐^{ひも}がだらりとあり。

村越 さあ、どうぞ。

七左 御免、真平御免。
まつびら

腰を^{かが}屈め、摺^{すり}足^{あし}にて、撫子の前を通り、すすむる蒲団^{ふとん}の座に、がつきと着く。

撫子 ようおいで遊ばしました。

七左 ははつ、奥さん。（と倒^{さか}になる。）

撫子 （手を^{つか}支えたるまま、つつと退^する。）

村越 父、母の御懇意。伯父さん同然な方だ。——高原さん……それは余所^{よそ}の娘です。

七左 （高らかに笑う）はッはッはッ、いずれ、そりや、そりや、いずれ、はッはッはッ

はッ。一度は余所の娘御には相違^{ちが}ないてな。いや、婆^{ばあ}どのも、かげながら伝え聞いて申

しておる。村越の御子息が、目のあたり立身出世は格別^まじや、が、就^な中^{かん}、豪^えいのは

この働きじや。万一この手廻^ましがのうてみさつしやい、団子^{かじ}噛^かるにも、蕎麦^{そば}を食うにも、

以来、欣弥さんの嫁御の事で胸^つが詰^まる。しかる処へ、奥方^{おくがた}連^づれのお乗込みは、これは学

問修業^{やり}より、槍^{やり}先の功名^と、と称^よえて可^よい、とこう云うてな。

この間に、おりく茶を運ぶ、がぶりとのむ。

はッはッはッはッ。

撫子弱っている。

村越 （額に手を当て） いや、召使い……なんですよ。

七左 いずれそりや、そりやいずれ、はッはッはッ、若いものの言う事は極きまつておる。――

――奥方、気にせまい。いずれそりや、田鼠でんそく化為鶉うずめ、雀すずめ入海かいちゆう中ちゆう為蛤はまぐり、

とあつてな、召つかいから奥方になる。――老人田舎もののしようがには、山の芋を穿ほ

つて鰻うなぎとする法を飲込んでゐる。拙せつしや者、足輕ではござれども、（真面目に）松本の

藩士、士族でえす。刀に掛けても、追おつつけ表おもてむき向の奥方にいたす、はッはッはッ、――

――これ遁にげまい。

撫子、欣弥の目くぼせに、一室ひとまにかくる。

欣弥さんはお奉行様じや、むむ、奥方にあらず、御台所みだいどころと申そうかな。

撫子 お支度が。（――いい由よし知らせる。）

村越 さあ、小父おじさん、とにかくあちらで。何からお話を申して可よいか……なにしろまあ、

那室あちらへ。

七左 いずれ、そりや、はッはッはッ、御馳走には預るのじや、はッはッはッ。遠慮は不ぶ沙汰さた、いや、しからば、よいとまかせのやつとこな。（と云つて立つ。村越に続いて一ひ

室とまに入らんとして、床の間の菊を見る）や、や、これは潔さわやかく爽さわやかじや。御主人の氣象によ
く似ておる。

欣弥、莞爾にっこりして撫子の顔を見て、その心づかいを喜び謝す。撫子嬉しそうに胸を抱
く。

二人続いて入る、この一室襖ふすま、障子にて見物の席より見えす。

七左（襖うちの中にて）ここはまた掛花活かけばないけに山茶花さざんかとある……紅あかいが特に奥方じやな、は
ッはッはッ。

撫子、勝手に立つ。入いれかわりて、膳部二調ぜんぶ、おりく、おその二人にて運び、やがて引
返す。

撫子、銚子ちようし、杯洗はいせんを盆にして出で、床なる白菊を偶ふと見て、空瓶あきびんの常夏に、膝
をつき、ときの間にしほみしを悲かなむ状しさまにて、ソと息を掛く。また杯洗を見て、花を挿
直ちよくし、猪口ちよくにて水を注つぎ入れつつ、ほろりとする。

村越（手たを拍たたく。）

撫子 はい、はい。（と軽く立ち、襖に入る。）

七左、程もあらせず、銚子ひつつかを引攪ひつつかんで載せたるままに、一人前ひとりまえの膳を両手に捧げ

て、ぬい、と出づ。

村越 あきさま（呆れたる状して続く）小父さん、小父さん、どうなすった……どうなさるんです。

おいくさん、お前粗相をしやしないかい。

七左 からから（呵々と笑う）

はッはッはッ。慌てまい。うろたえまい。騒ぐまい。信濃国 しなののくにひ

東筑摩郡 がしちくまこおり

松本中が粗相をしても、腹を立てる私ではない。証拠を見せよう。それこ

れじゃ、（萌黄古びて茶となりたるに大紋の着いたる大風呂敷を拡げて、膳を包む）――

――お銚子は提げて持つて行くわさ。

村越 小父さん！

七左 慌てまい、はッはッはッ。奥方もさて狼狽えまい。騒ぐまい。膳は追て返す。狂 きちが

人じみたと思わりようが、決してそうでない。実は、婆々どのの言うことに――やや

親仁どのや、ぬしは信濃国東筑摩郡松本中での長尻ぞい……というて奥方、農産会に

出た糸瓜ではござらぬぞ。三杯飲めば一時じや。今の時間で二時間かかる。少い人た

ち二人の処、向後はともあれ、今日ばかりは一杯でなしに、一口呑んだら直ぐに帰って、

意気な親仁になれと云う。の、婆々どののたつての頼みじや。田鼠化為鶉、親仁、すな

わち意気となる。はッはッはッ。いや。当家のお母堂様も御存じじやった、親仁こう

いう事が大好きじゃ、平に一番遣らせてくれ。

村越（ともに笑う）かえつてお心任せが可いでしょう。しかし、ちようど使のものもあります、お恥かしい御膳ですが、あとから持たせて差上げます。

撫子 あの、赤の御飯を添えまして。

七左 過分でござる。お言葉に従いますわ。時に久しぶりで、ちよつと、おふくろ様に御挨拶を申したい。

村越 仏壇がまだ調いません、位牌だけを。

七左 はあ、香花、お茶湯、御殊勝でえす。達者でござったらばなあ。

村越（涙ぐむ。）

七左 おふくろどの、主がような後生の好人は、可厭でも極楽。……百味の飲食。蓮の台に居すくまつては、ここに（胃をたたく）もたれて可うない。ちと、腹ごなしに娵へ出て来て、嫁御にかき餅でも焼いてやらしやれ。（目をこすりつつ撫子を見る）さて、ついでに私の意気になった処を見され、御同行の婆々どのの丹精じゃ。その婆々どのから、くれぐれも、よろしゅうとな。いやしからば。

村越（送り出す）是非近々に。

七左 おんでもない。晩にも出直す。や、今度は長^{なが}尻^{ぢり}長左衛門じゃぞ。奥方、農産会に出た、大糸瓜の事ではない、はッはッはッ。(出て行く。)

村越座に帰る。

撫子 (鬢^{びん}に手をあて、悄^{しお}れて伏す) 旦那様、済みません。

村越 お互の中にさえ何事もなければ、円髻^{まげ}も島田も構うものか。

この間に七左衛門花道の半ばへ行く、白糸出づ。

白糸 (行違い、ちよつと小腰) あ、もし、旦那。

七左 ほう、私^{わし}かの。

白糸 少々伺いとう存じます。

七左 はいはい。ああ何なりとも聞くが可^よい。信濃国東筑摩郡松本中は鵜^うでござる。

白糸 あの、新聞で、お名前を見て参ったのでございますが、この御近処に、村越さんとおっしゃる方のお住居^{すまい}を、貴方、御存じではございませんか。

七左 おお、弥兵衛^{やへえ}どの御子息欣弥どの。はあ、新聞に出ておりますか。田鼠^{たね}化為鵜^う、馬^ば

丁^{つとう}すなわち奉行となる。信濃国東筑摩郡松本中の評判じゃ。唯^{ただ}今^{いま}、その邸^{たて}から出て来た処よの。それ、そこに見えるわ、あ、あれじゃ。

白糸 ああ、嬉しい、あの、そして、欣弥さんは御機嫌でございますか。

七左 壮健たつしやとも、機嫌は今日のお天気です。早う行つて逢いなさい。

白糸 難有ありがとう、飛んだお邪魔を——あ、旦那。

七左 はいはい。

白糸 それから、あの、ちよつと伺いとう存じますが、欣弥さんは、唯今、御家内はお幾い人。
人。

七左 二人じゃが、の。

白糸 お二人……お女中と……

七左 はッはッはッ、いずれそのお女中には違いない。はッはッはッ。

白糸 (ふと氣にして) どんなお方。

七左 どんなにも、こんなにも、松本中での、あでやかな奥方じゃ。

白糸 お家うちが違やしませんか。

七左 村越弥兵衛どの御子息欣弥殿。何が違う。

白糸 おや、それじゃ私の生いきり霊ようが行つてゐるのかしら。

七左 ええ……変なことを言う。

白糸 見て下さい、私とは――違いますか。

七左 いや、この方が、床の間に活けた白菊かな。

白糸 え。

七左 まずおいで。（別れつつ）はあてな、別嬪二人二千石、功名々々。（繻子の洋

傘を立てて入る。）

白糸 （二三度 徊して、格子にかかる）御免なさい。

これよりさき、撫子、膳、風呂敷など台所へ。欣弥は一室に入り、撫子、通盆を持って齊しく入る。

その （取次ぐ）はい。

白糸 （じろりと、その髪容を視む）村越さんのお住居はこちらで？

その はい、どちらから。

白糸 不案内のものですから、お邸が間違えますと失礼です。この村越様は、旦那様のお名は何とおっしゃいますえ。

その はい、お名……

云いかけて引込むと、窺いたる、おりくに顔を合せる。

りく 私、知っててよ。（かわって出づ）いらつしやいまし。

白糸 おや。（と軽く）

りく あの、お訊ねたずになりました、旦那様のお名は、欣弥様でございますの。

白糸 はあ、そしてお年紀としは……お幾つ。

りく あのう、二十八九くらい。

白糸 くらいでは不可いけませんよ。おんなじお名でおんなじ年くらいでも……の、あの、あの、とないの、とは大変、大変な違いなんですから。

りく あの、何の、あるのと、ないのと、なんです。

白糸 え

りく 何の、あるのと、ないのと、とですか？

白糸 お髯ひげ。

りく ほほほ、生やしていraftしやるわ。

白糸 また、それでも、違いけなうと不可い。くらいでなし、ちゃんと、お年紀を伺いとうござんすね。

りく へい。

かげんな顔して引込むと、また窺いいたる、おその、と一所に笑い出して、二人ばたばたと行つて襖際へ……声をきき知る表情にて、衝と出づる欣弥を見るや、どきまぎして勝手へ引込む。

村越。つつと出で、そこに、横を向いて立つたる白糸を一目見て、思わず手を取る。不意にハツと驚くを、そのまま引立つるがごとくにして座敷に來り、手を離し、とすわり、一あしよろめいて柱に凭る白糸と顔を見合せ、思わずともに、はらはらと泣く。撫子、襖際に出で、ばったり通盆を落し、はつと座ると一所に、白糸もトンと座につき、三人ひとしく会釈す。

欣弥、不器用に慌しく座蒲団を直して、下座に來り、無理に白糸を上座に直し、膝を正し、きちんと手をつく。

欣弥 一別以来、三年、一千有余日、欣弥、身体、髪膚、食あり生命あるも、一にもつて、貴女の御恩……

白糸 (耳にも入らず、撫子を見詰む。)

撫子 (身を迂らして、欣弥のうしろにちぢみ、齊しく手を支く。)

白糸 (横を向く。)

欣弥 暑いにつけ、寒いにつけ、雨にも、風にも、一刻もお忘れ申した事はない。しかし何より、お健すこやかで……

白糸 横を向きつつ、一室の膳に目をつける。気をかえ煙草たばこを飲まんとす。火鉢に火なし。

白糸 火ぐらいおこしておきなさいなね、芝居をしていないでさ。

欣弥 (顔を上げながら、万感胸に交々こもこも、口吃きつし、もの云うあたわず。)

撫子 (慌あわただしく立ち、一室なる火鉢を取って出づ。さしよりて) 太夫さん。

白糸 私は……今日は見物さ。

欣弥 おい、お茶を上げないかい。何は、何は、何か、菓子は。

撫子 (立つ。)

白糸 そんなに、何も、お客あつかい。敬して何とかってしなくっても可ようござんす。お茶のお給仕なら私がするわ。

勝手に行くゆふり、颯さつと羽織を脱ぎかく。

欣弥 飛んでもない、まあ、どうか、どうか、それに。

白糸 ああ、女中のお目見得めみえがいけないそうだ。それじゃ、私帰ります。失礼。

欣弥（笑う）何を云うのだ、帰ると云つてどこへ帰る。あの時、長野の月の橋で、——
一生、もう、決して他人ではないと誓つたじゃないか。——此家へ来てくれた以上は、

門も、屋根も、押入も、畳も、その火鉢も、皆、姉さんのものじゃないか。

白糸 おや、姉さんとなりましたよ。誰かに教つたね。だあれかも、またいまのよううまい口に——欣さん、門も、屋根も押入も……そして、貴女は、誰のもの？

欣弥（無言。）

白糸 失礼！（立つ。）

欣弥 大恩人じゃないか、どうすれば可い。お友さん。

白糸 恩人なんか、真ツ平です。私は女中になりたいの。

欣弥 そんな、そんな無理なことを。

撫子 太夫さん。（間）姉さん、貴女は何か思違いをなすつてね。

白糸 ええ、お勝手を働こうと思違いをして来ました。（投げたように）お目見得に、落第か、失礼。

欣弥 ええ、とにかく、まあ、母に逢つて下さい、お位牌に逢つておくれ。撮写のは嫌だ、と云つて写真はくれず、母はね、いまわの際まで、お友さん、姉さま、と云つてお前に

逢いたがった。（声くもる）そして、現に、夢心に、言いあてたお前の顔が、色艶から、目鼻立まで、そっくりじゃないか。さあ。（位牌を捧げ、台に据う。）

白糸（衣紋を直し、しめやかに手を支う）お初に……（おなじく声を曇らしながら、また、同じように涙ぐみて、うしろについて居る撫子を見て、ツツと位牌を取り、胸にしかと抱いて、居直つて）お姑様、おつかさん、たとい欣さんには見棄てられても、貴女にばかりは抱ついて甘えてみようごんした。おつかさん、私や苦勞をしましたよ。……御修業中の欣さんに心配を掛けてはならないと何にも言わずにいたんです。寔れた顔を見て下さい。お友、可哀想に、ふびんな、とたった一言。貴女がおっしゃって下さいまし。お位牌を抱けば本望です。（もとへ直す）手も清めないで、失礼な、堪忍して下さいまし。心が乱れて不可ません。またお目にかかります。いいえ、留めないで。いいえ、差当った用がござんす。

思切りよくフイと行くを、撫子慌しく縋つて留む。白糸、美しき風のごとく格子を出でてハタと鎖す。撫子指を打つて悩む。

欣弥（続いて）私は、俺は、婦の後へは駈出せない、早く。

撫子（ややひぞる。）

欣弥 早く、さあ早く。

撫子 (門^{かど}を出で、花道にて袖を取る) 太夫さん……姉さん。

白糸 お放し！

撫子 いいえ。

大正五（一九一六）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六巻」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：忠夫今井

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錦染滝白糸

——其一幕——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 泉鏡花

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>